



司馬遼太郎

ニューヨーク散歩

街道をゆく三十九

街道をゆく

三十九

司馬遼太郎

朝日新聞社

一九九四年 二月 一日

第一刷発行

街道をゆく 三十九

著者 司馬遼太郎

発行者 天羽直之

印刷所 凸版印刷

製本所 青柳製本

発行所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地五-3-2
電話 ○三-三五五-〇一三一(代表)
編集・書籍第一編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇-一七三〇

定価はカバーに表示してあります

街道をゆく

三十九

ニューヨーク散歩

本書には「週刊朝日」一九九三年三月五日号・連載第十二
十五回から、六月二十五日号・第千四十回分までを収録。

目次

ニューヨーク散歩

マンハッタン考古学

7

平川英二氏の二十二年

21

ブルックリン橋

35

橋をわたりつつ

49

ウィリアムズバーグの街角

63

ハリスの墓

79

コロンビア大学

93

ドナルド・キーン教授

107

角田柳作先生

119

御伽草子

133

ハドソン川のほとり

147

学風

159

日本語

171

奈良絵本

183

ホテルと漱石山房

さまざまな人達

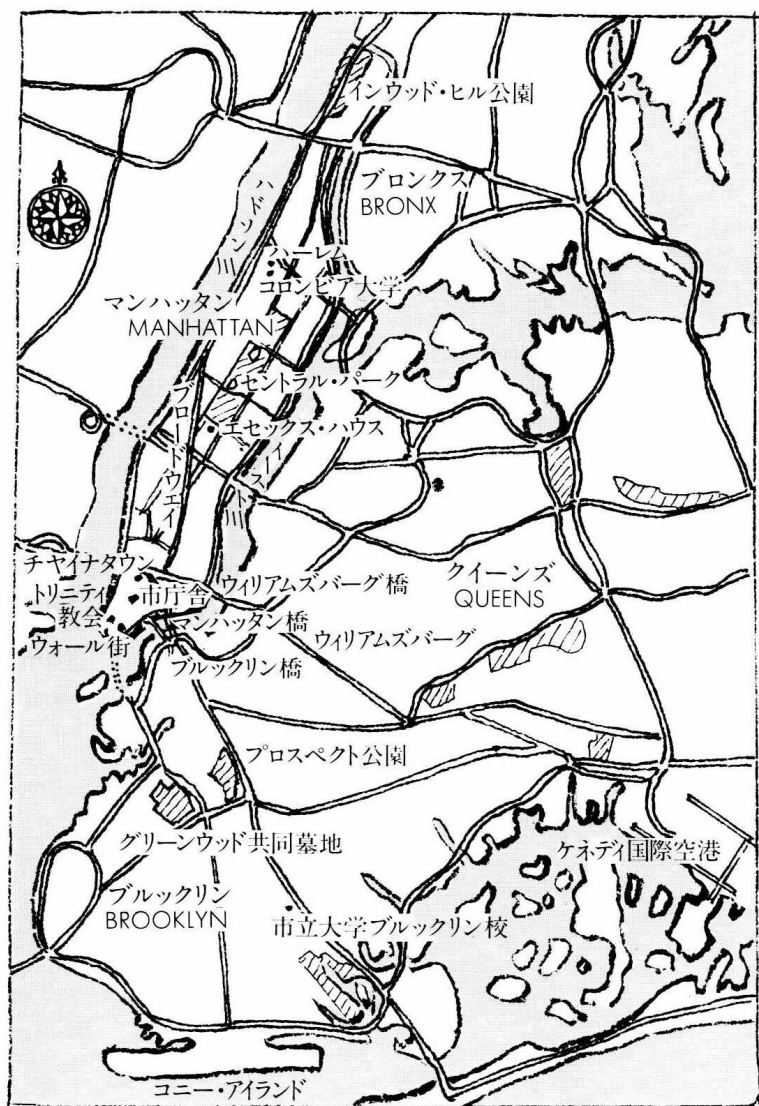
209

197

題字 棟方志功
装幀 原 弘
え 安野光雅
地図 熊谷博人

マンハッタン考古学





その巨漢は、黒人の街のハーレムのうまれである。いつも、ワゴンの運転台に、大きな尻を押しこんでいる。姓をきくと、

「マクドナルドだ。ドナルドとよんでくれてもいい」

そんないい加減さが、私の氣に入った。

齡は三十半ばで、海兵隊の軍曹のようにたくましい。根っからのニューヨークっ子である。

他の土地には住んだことがない、という。

「よ、その土地なら、とつくに死んでるよ」

「たとえば、カリフォルニアなら？」

「ノーノー」

手を振った。この日、一九九二年二月二十九日である。二カ月後に、カリフォルニアのロサンゼルスやサンフランシスコに黒人暴動がおこり、暴徒は韓国人商店街の店主たちから、拳銃やライフル銃で狙撃されたりした。

なぜニューヨークだから生きのびているのか、理由は聞きもらした。それほどニューヨークは自分にとっていいまちだ、というだけの形容かもしれない。

以前、税関の役人だったという。

「からだ^もが、保たなかった」

荷物を運ぶばかりのしごとだったらしい。

かれのワゴンは、アフリカに象狩りにでもゆけそうなほどがっちりしていた。フォードである。

「なにしろ、かれはこの車一台で妻子四人を養っているんです」

と、ニューヨーク在住の平川英二氏ひらかわえいじはいった。平川さんは、徳と良心のかたまりのような人である。おそらくその思想と無縁ではなからうが、古い型の髪型をし、肩のあたりが箱のような古い型の冬オーバーを着て、戦前の海軍士官のようなにおいがある。

あるとき平川さんが日本のテレビ会社のニューヨーク取材をひきうけたとき、機材などを運ぶ人手にこまって、旧知のマクドナルド氏にたのんだ。マクドナルド氏にとって一時的な仕事のはずだったのが、すっかり気に入って、恒常的なしごとである税関をやめてしまった。

平川さんは、責任を感じてしまった。といって、会社を経営しているわけではないから、たえずマクドナルド氏に仕事をあたえるわけにはいかない。

「マクドナルドさんは、五人家族ですから」

そんなわけで、マクドナルド氏が、私のためにワゴン車を持ってやってきてくれたのである。

平川さんについていうと、北京に古くから住んでいる人を老北京ラオペイジンというが、この人は老紐育である。平素車を運転しないというだけでも、この人の思想の強さがわかる。もちろん、運転できないわけではなく、この知識人は、ニューヨークにきた当座、タクシー・ドライヴァ

ーをしていた。

ワゴン車に乗ったものの、ゆくあてはない。

とりあえずマンハッタン島を走っているだけでいい。それだけではマクドナルド氏もこまるだろうから、「北端を見たいですね、マンハッタン島の」とたのんだ。

ワゴン車は、ホテルの玄関ききを離れた。私どものホテルは、セントラル・パークの南端にあった。やがてコロンバス・サークルを経て、北に折れ、高速道路を北上した。

島の北端へゆきたいということに、さほどの理由はない。以前この街にきたとき、マンハッタン島の南端まで行き、河口とも海のはじまりともつかぬ水景をながめた。だからこんどは北端だとおもっただけである。

周知のように、マンハッタン島はニューヨーク市の都市機能を軍艦の主要部のように満載している。両側を川にはさまれて都心を形成しているという点ではパリのシテ島や大阪の中之島や堂島に似ているが、それらが川の中洲なかすであるのに対し、こちらはハンマーで叩いても容易に割れそうにない岩盤でできあがっている点がちがう。マンハッタンとはインディアン語だそうである。「丘からなる島」という意味だという。

最初、ニューヨークに植民したのはオランダ人だったことはよく知られている。

かれらは、一六二一年、アメリカ開拓を目的とした西インド会社をつくり、二六年にマンハッタン島をインディアンから買いとった。一六二六年といえど日本では三代将軍徳川家光の寛永三年で、鎖国がおこなわれる数年前であり、邦人による海外発展もさかんだった。たとえば播州高砂たかさきの徳兵衛という者が天竺てんじく（インド）まで行って貿易をしていたし、山田長政もシャム（タイ）で活躍していた。

そういう世界的気分のなかで、オランダの西インド会社の代表がこのあたりに上陸し、インディアンの代表からマンハッタン島を買ったのである。買値は、たった六〇ギルダーだった。

そのころ、オランダ本国ではライデン大学とその周辺の町がすでに建設済みで、そのときの道路舗装につかった石いし、くれが一ギルダーだった。そのことは、ライデンの市役所でたしかめた。オランダには石がないため、スイスなどから輸入した。大きさは赤ちゃんの頭ほどである。

だから、マンハッタン島の買値は、ライデンの石いし、くれ六十個ぶんということになる。

むろん現金ではなかったらしい。六〇ギルダー相当分のガラス玉や酒類、雑貨類だった。

アメリカ史上、この売買は「史上最大のバーゲン」といわれる。

この場合のバーゲンは第一の意味の契約とか取引ということではなく、バーゲンセールの略のバーゲンで、掘り出し物というほうだろう。

ところで、私どもがとまっているホテルからすこし南にさがったあたりに、「アルゴンキン・ホテル」という名門のホテルがある。アルゴンキンはインディアン語である。

部族名でなく、インディアン語の一語族の名称らしい。当時、マンハッタン島にいたインディアンは、アルゴンキン語をつかっていた。かれらはこの島を売りわたすバーゲンにあたつて、

「よろしい、その値で手を打とう」

と、アルゴンキン語でいったはずである。

その方言の名称が、ホテルの名として冠せられている。

おそらくインディアンへの尊敬をこめて命名されたのだろう。六〇ギルダーでマンハッタン島を売ったというのは、インディアンの心が、青空のように大きかったという証拠である。

マクドナルド氏は、アフリカンだから、インディアンとは関係はない。

かれの先祖も、ニューヨークの歴史のなかで苦勞してきたはずである。

ワゴン車は、軍用車のように北へ走っている。

車高が高いため、まわりにひしめいている車の屋根までみえる。運転者たちの顔は、人種として雑多である。八百屋の店先のような多様さが、ニューヨークにきたよろこびを覚えさせる。

故ジョン・スタインベックは『アメリカとアメリカ人』のなかで、新規にやってきた移民（民族）がきらわれ者の役をひきうける、といった。たとえばアイルランド人がきらわれていたのが、イタリア人がやってくることで緩和された。

日本の幕末、アメリカではWASPが主流だった。WASPとは、白くて（W）、アングロサクソン（AS）で、プロテスタント（P）であること。ただしアングロサクソンではないが、初期入植集団であるオランダ系はWASPに準ずるものとされていた。

かれらからみると、アイルランド島からやってきたアイリッシュは、当初、異様だった。アングロサクソンではなくケルト人だったし、ほとんどがカトリックで、その上、数百年もイギリスに支配されていたために、集団としての鬱懷がつよかった。

さらには、アイルランド島がいわば農業一色の島だったから、手に職がなかった。都市生活をするには、機械技術か、帳簿をつける技能か、ともかくも飯のたねになるわざを持っていなければならぬ。でなければ力仕事をするしかなく、力仕事には個性がないために——つまり替えが利くために——たれかにとってかわられる不安定さがある。

大西洋をわたってニューヨークにやってきたアイルランド人たちは、ほとんどが港湾労働者になった。降りた波止場で、そのまま労働力という商品になったのである。

嘉永六（一八五三）年、人類文明の代表者のような押し出しでペリーが艦隊をひきいて江戸時代の日本にやってきた。